〔萬葉集十一古今相聞往來歌〕問答

吾妹兒爾戀而爲便無三白細布之袖反之者夢所見也

吾背子之袖反夜之夢有之眞毛君爾如相有

右二首

〔倭訓栞中編八古〕ころもをかへす　夜の衣をかへしてぬれば、思ふ人を夢にみるといひ傳へり、萬葉集には、袖をかへしてぬれば、夢に見ゆるよしの歌あまたあり、同義なるべし、又衣をかへせば戀の心なぐさむのよし、六帖によめり、

〔古今和歌集十二戀〕題しらず　小野小町

いとせめて戀しき時はむば玉のよるの衣を返してぞきる

〔古今和歌集打聽十二〕夜の衣をかへして寢れば、戀しき人の必夢にみゆると云諺あれば、よめる也、萬葉には袖かへすとあり、

〔後撰和歌集十二戀〕だいしらず　よみ人しらず

白露のおきてあひみぬ事よりはきぬかへしつゝねなんとぞ思

〔消閑雜記〕戀しき人を夢にみんとおもへば、雙陸盤を枕にして、衣をかへして、夢の妙童菩薩を念ずれば、必夢にみるとなり、ある歌に、

いとせめて戀ひしきときはぬば玉のよるの衣をかへしてぞぬる

〔更科日記〕はゝ一尺の鏡をいさせて、えゐてまいらせぬかはりにとて、そうをいだしはてゝ、はつせにもうでさすめり、三日さぶらひて、此人のあべからんさま、夢にみせ玉へなどいひて、まうでさするなめり、そのほどは精進せさす、このそうかへりて、夢をだにみでまかでなんが、ほいなきことといかゞ歸りても申べきと、いみじうぬかづきおこなひてねたりしかば、御帳のかたより、い

代人求夢